平成 29 年度　各種調査結果等を活用した学力保障の取組事例

事務所名	県北教育事務所	学校名	洋野町立中野中学校	ＴＥＬ	0194－67－2105

小中連携を中心とした学力保障の取組

【今年度の目標】

（１）基礎的・基本的な知識や技能の習得と定着を図り、県平均との差を前年度より１ポイント向上させる。

（２）生徒質問紙の「授業の内容がよくわからない」と回答する生徒を０（ゼロ）にする。

【組織的な対応を図る上で工夫した点】

Ⅰ　「確かな学び、豊かな学び」実現プランの全体共有と取組の確実な推進

Ⅱ　小中連携

Ⅲ　保護者・地域との連携

【具体的な取組】

Ⅰ　「確かな学び、豊かな学び」実現プランの全体共有と取組の確実な推進

年度初めの職員会議において､教務部から「確かな学び、豊かな学び」実現プランについて説明し、学力保障を図るために、以下の取組を行うことを確認し、全職員で共通理解を図った。

○いわての授業づくり３つの視点（学習の見通し、課題を解決するための学習活動、学習の振り返り）を授業に位置付けること。

○記述問題の正答率が低く無解答の割合も高い傾向にあることから、自分の考えを文章にまとめたり､発表や説明をしたりするなどの言語活動を積極的に取り入れた授業や教育活動を展開すること。

○学期に一回（一週間程度の期間）、教員相互に授業を見合う期間を設け、参観した授業から学んだことを交流し合い、自己の授業改善に努めること。

○全学年の数学・英語の授業においてＴＴ指導を実施すること。

○教務部による計画に基づき、基礎的な知識の定着を目指した「５０問テスト」を５教科で実施すること。

○下位の生徒への支援だけでなく、英語の自由英作文の取組、国語の校外の各種作文コンクール取組、英国数の各種検定挑戦など上位の生徒を伸ばす指導を積極的に行うこと。

１週間、学校の朝学習の時間と家庭学習で学習してテストに臨みます。

合格は８０点以上。８０点未満の生徒は合格するまで再テスト。ほとんどの生徒が１回で合格します。

【50 問テスト結果】

	国語			社会			数学		
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
平均点(点)	86.2	92.7	97.3	95.1	92.6	89.1	93.4	93.1	97.3
合格率(%)	81.8	94.1	100.0	100.0	100.0	87.5	90.0	94.1	93.8

Ⅱ　小中連携

１　小中連携研修会

1地区1小中の特性を生かし、9年間で中野の子供たちを育てていくという観点から、積極的に連携を図った。それぞれの学校の授業参観を適宜設けたり、合同の小中連携研修会を年2回実施したりした。

【6月の小中連携研修会】

・「全国学調」「中1新入生テスト」の分析結果の共有
・学習規律の共通理解
・家庭学習の在り方と保護者への啓蒙の仕方の共通確認
・小中共通の重点指導内容（「書くこと」「振り返り」）の確認
・生徒指導に関わる情報共有

【11 月の小中連携研修会】

・小中共通の重点指導内容を視点にした授業研究会
・家庭学習における小中共通の取組についての意見交流
・「県学調」の分析結果の共有
・全国学調後の指導についての交流
・「見通し」「学習活動」「振り返り」の深め方の確認
・「書く活動」の位置付けについての交流

【国語科での授業前学習での書く活動】

11 月の小中連携研修会では、小学校での「国語科」「算数科」「社会科」の授業を参観し、小学校での指導の工夫を学んだり、教科の学習内容の系統性の理解を深めたりすることができた。協議では、小中共通の重点指導内容である「書く活動」「振り返りの活動」について交流し、本校の各教科での重点指導内容の指導の工夫につなげている。

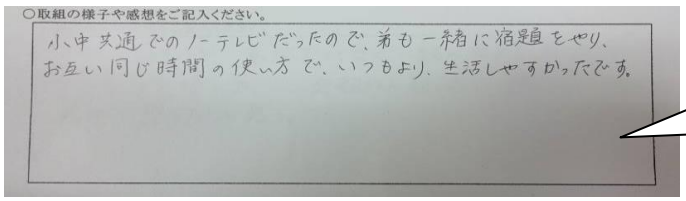
また、両校の校内研究会の際には、参加可能な教員が積極的に参加し、各校教員の指導の工夫を学んだり、各種調査結果の分析を共有したりしている。

２　まなびフェストでの連携

これまで、学校ごとで作成・配布していたまなびフェストの形式を小中で合わせた。中野小・中での９年間の指導の在り方として、PTA 総会や地区懇談会などで繰り返し説明し推進を図った。作成にあたっては、発達段階に応じた家庭学習など、家庭でも見通しをもって取り組めるよう配慮している。

３　家庭学習の強化を目指した共同取組

まなびフェストで家庭に周知した定期テスト前の「ノーテレビ・ノーゲーム」に取り組むにあたっては、小学校と共同して実施している。また、計画的な家庭学習に取り組む力が身に付くよう、テスト期間の２週間前に計画を立てさせるとともに、期末テスト前３日間を５時間授業として、放課後の時間に学級でテスト勉強をする時間を確保している。


○取組の様子や感想をご記入ください。
小中共通でのノーテレビだったので、弟も一緒に宿題をやり、お互い同じ時間の使い方で、いつもより、生活しやすかったです。

「ノーテレビ・ノーゲーム」の取組に寄せられた保護者感想

Ⅲ　保護者・地域との連携

まなびフェストに家庭学習の目標時間を掲げるなどして保護者の理解と協力を得られるようにするとともに、ＰＴＡ総会や教振中野実践区総会、地区懇談会などの機会には、まなびフェストの内容や諸調査の結果について説明している。

本校では、学力保障を図るためには、教育振興運動の取組や保護者の協力体制が必要と考え、食育や検診結果を踏まえた健康管理を学校・保護者・地域が一体となって取り組むことにも力を入れている。また、今年度は、県中文祭への参加に向けて、地元保存会の協力の下に郷土芸能の練習を重ねたり、練習の成果を地域の祭りで披露したりした。これらの取組を通して、地域全体で子どもたちを健全に育もうとする体制が強化され、個々の家庭の教育力の向上にもつながっている。

【成果】

○全職員で共通理解を図った授業改善の取組

「『確かな学び、豊かな学び』実現プランの全体共有と取組の確実な推進」の中で全職員が意識して取り組んだことが、今年度の県学調の生徒質問紙の回答集計結果に成果として現れていると捉えられる。

質問事項	選択肢	本校(%)	県（%)	差
普段の授業の中で、自分の考えを発表する機会が与えられていると思いますか。	そう思う	９４	４８	＋４６
普段の授業で、目標が設定されていると思いますか。	そう思う	９４	７１	＋２３
普段の授業で、最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか。	そう思う	７６	４０	＋３６
話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。	そう思う	９４	４３	＋５１

また、各教科での授業改善の成果も、今年度の県学調の生徒質問紙の回答集計結果に現れていた。

質問事項	選択肢	本校(%)	県（%)	差
国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いていますか。	書いている	７１	３７	＋３４
社会の授業で学習問題を解決するとき、資料から関係のあることを読み取る活動を行っていると思いますか。	そう思う	１００	５５	＋４５
数学の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか。	考える	８２	４１	＋４１
理科室で観察や実験をどのくらい行っていますか。	週１回以上	７６	４８	＋２８
まとまりのある英文を聞いたり読んだりして、文書全体の概要や要点をとらえる活動をしていると思いますか。	そう思う	５９	４４	＋１５

○家庭学習の充実を目指した取組

「小中連携」及び「家庭・地域との連携」の取組の中の家庭学習の充実につながる取組により、成果が上がっていることが、今年度の県学調の生徒質問紙の回答集計結果から捉えられた。

質問事項	選択肢	本校(%)	県(%)	差
学校の授業以外で、1 日にどれくらいの時間勉強しますか	２ｈ～３ｈ	５３	１９	＋３４
	１ｈ～２ｈ	３５	４７	－１２
家で勉強する内容は、次のどれが多いですか。	宿題＋復習	４１	３３	＋８
	宿題＋復習＋予習	１２	５	＋７
家で調べたり、文章を書いたりする宿題がありますか。	ある	６５	１９	＋４６

○今年度の目標に対する結果

（１）「基礎的･基本的な知識や技能の習得と定着を図り､県平均との差を前年度より1ポイント向上させる」について

【第２学年の経年比較（県平均正答率との差）】

	H28 新入生学調等	H29 県学調	経年差
国語	＋3.0	＋5.0	＋2.0
数学	＋6.8	＋5.7	－1.1
英語	＋3.7	＋4.0	＋0.3

【第３学年の経年比較（県平均正答率との差）】

	H28 県学調	H29 全国学調		経年差	
		Ａ問題	Ｂ問題	Ａ問題	Ｂ問題
国語	＋5.5	＋6.9	＋7.8	＋1.4	＋2.3
数学	－0.3	＋3.0	＋7.4	＋3.3	＋7.7

（２）「生徒質問紙の「授業の内容がよくわからない」と回答する生徒を０（ゼロ）にする」について

【授業の内容が「３．どちらかといえばわからない」「４．わからない」の回答の割合（%）の変化】

	国語	数学	社会	理科	英語
Ｈ２８年	０．０	１１．７	０．０	０．０	１７．６
Ｈ２９年	０．０	０．０	０．０	０．０	１１．７
	－	↑	－	－	↑

【授業の内容が「１．よくわかる」の回答の割合（%）の変化】

	国語	数学	社会	理科	英語
Ｈ２８年	４７．１	４１．２	７０．５	５８．８	５２．９
Ｈ２９年	５２．９	８８．２	８８．２	７６．５	５２．９
	↑	↑	↑	↑	－

（県学調の生徒質問紙回答集計による比較）

目標を達成できなかった項目も見られたが、全体的には取組の成果があったと捉えられる。その要因として、小中連携を積極的に進めたことにより、小学校での各種調査結果を共有したり、小学校での取組を理解したりしたことによって、９年間で中野の子どもを育てるという意識を全職員が以前よりも強くもつようになったからと考える。